

4/4 Sat.

第286回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.286 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

4/5 Sun.

第286回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.286 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Honorary Guest Conductor
クラリネット
Clarinet
第1コンサートマスター
First Concertmaster

モーツァルト
MOZART

[休憩]
[Intermission]

R. シュトラウス
R. STRAUSS

尾高忠明 (名誉客演指揮者) -p.6
TADAAKI OTAKA

ニコラ・バルディルー -p.8
NICOLAS BALDEYROU

林 悠介 -p.15
YUSUKE HAYASHI

クラリネット協奏曲 イ長調 K. 622 [約28分] -p.13
Clarinet Concerto in A major, K. 622

I. Allegro
II. Adagio
III. Rondo: Allegro

交響詩〈英雄の生涯〉 作品40 [約45分] -p.14
Ein Heldenleben, op. 40

I. 英雄 - II. 英雄の敵 - III. 英雄の伴侶 - IV. 英雄の戦い -
V. 英雄の業績 - VI. 英雄の引退と完成

4/22 Wed.

第691回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.691 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

ハイドン
HAYDN

モーツァルト
MOZART

[休憩]
[Intermission]

ベートーヴェン
BEETHOVEN

アイヴァー・ボルトン -p.7
IVOR BOLTON

河村尚子 -p.8
HISAKO KAWAMURA

戸原 直
NAO TOHARA

歌劇〈哲学者の魂、またはオルフェオと
エウリディーチェ〉序曲 [約4分] -p.16
“L'anima del filosofo, ossia Orfeo ed Euridice” Overture

ピアノ協奏曲 第19番 へ長調 K. 459 [約26分] -p.17
Piano Concerto No. 19 in F major, K. 459

I. Allegro
II. Allegretto
III. Allegro assai

交響曲 第7番 イ長調 作品92 [約36分] -p.18
Symphony No. 7 in A major, op. 92

I. Poco sostenuto - Vivace
II. Allegretto
III. Presto
IV. Allegro con brio

4/28 Tue.

第657回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.657 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor

天使 (メゾ・ソプラノ)
Angel (Mezzo Soprano)

ゲロンティアス/魂
(テノール)
Gerontius/Soul (Tenor)

司祭/苦悶の天使
(バリトン)
Priest/Angel of the Agony (Baritone)

合唱
Chorus

合唱指揮
Chorusmaster

第1コンサートマスター
First Concertmaster

エルガー
ELGAR

アイヴァー・ボルトン *-p.7*
IVOR BOLTON

ベス・テイラー *-p.9*
BETH TAYLOR

トーマス・アトキンス *-p.9*
THOMAS ATKINS

クリストファー・モルトマン *-p.10*
CHRISTOPHER MALTMAN

新国立劇場合唱団 *-p.10*
NEW NATIONAL THEATRE CHORUS

富平恭平 *-p.11*
KYOHEI TOMIHIRA

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

オラトリオ〈ゲロンティアスの夢〉 作品38
The Dream of Gerontius, op. 38
[約100分] *-p.19*

稽古ピアノ: 古瀬安子
原訳: 秋岡 陽
字幕原稿: 増田恵子
字幕操作: Zimaku+

【第I部】 Part I

1. 前奏曲
Prelude
2. イエス様、マリア様、私は死期が近づきました
Jesu, Maria – I am near to death
3. 奮い立て、私の弱った魂よ
Rouse thee, my fainting soul
4. 聖なるかな、力ある方、聖なる御神よ
Sanctus fortis, Sanctus Deus
5. 旅立ちなさい、キリスト者の魂よ
Proficiscere, anima Christiana

[休憩]
[Intermission]

【第II部】 Part II

6. 私は眠っていました
I went to sleep
7. この天使は、あのすばらしい一族の一員
It is a member of that family
8. しかし、どうでしょう! 私には激しい叫びが聞こえてきます
But hark! upon my sense comes a fierce hubbub
9. 私はあんな偽りの霊は見ません
I see not those false spirits
10. それより聴いてください! あの壮大で神秘的な響きを!
But hark! a grand mysterious harmony!
11. あなたの審判の時が近づきました
Thy judgement now is near
12. 私は裁きを下す方の御前に進みます
I go before my judge
13. 静かに穏やかに、いま解き放たれた魂を (天使の告別)
Softly and gently, dearly-ransomed soul (Angel's Farewell)

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
協力: アフラック生命保険株式会社

4/4
土曜マチネー

4/5
日曜マチネー

Maestro

指揮

尾高忠明
(名誉客演指揮者)

TADAAKI OTAKA, Honorary Guest Conductor

熟達した手腕で
描き表す
〈英雄の生涯〉



©読響

日本を代表する巨匠・尾高忠明が登場し、新シーズンの華々しい幕開けを飾る。大管弦楽を率いてR. シュトラウス〈英雄の生涯〉を披露。壮大かつドラマチックな情景を描写し、会場を興奮のクライマックスへと誘う。

1947年生まれ。桐朋学園大学、ウィーン国立アカデミーで学んだ後、東京フィル常任指揮者(74~91年/現・桂冠指揮者)に就任。BBCウェールズ響首席指揮者(87~95年/95~2025年桂冠指揮者)を務め、多くのイギリス音楽を手がけた。読響では1992~98年に第6代常任指揮者を務め、現在は名誉客演指揮者の地位にある。札幌響音楽監督(2004~15年/現・桂冠指揮者)、メルボルン響首席客演指揮者(10~12年)、新国立劇場オペラ芸術監督(10~14年)を歴任。現在は大阪フィル音楽監督、N響正指揮者、紀尾井ホール室内管桂冠名誉指揮者。21年から「東京国際指揮者コンクール」審査委員長を務めている。国内の主要楽団のほか、世界各地の楽団に客演。大英勲章CBE、英国エルガー協会から日本人初のエルガー・メダルなどを授与される。サントリー音楽賞、有馬賞(N響)、北海道文化賞、関西音楽クリティック・クラブ賞本賞、大阪文化祭賞、日本放送協会放送文化賞、JXTG音楽賞洋楽部門本賞など受賞多数。21年秋には、旭日小綬章を受章した。後進の指導にも力を入れ、東京芸術大学名誉教授、相愛大学および京都市立芸術大学客員教授、国立音楽大学招聘教授、桐朋学園大学特命教授を務めている。日本芸術院会員。

指揮

アイヴァー・ボルトン

IVOR BOLTON, Conductor

あふれ出る独創性
巨匠ボルトンが
名曲に魂を込める



©読響

2019年末に行われた読響〈第九〉演奏会を成功へと導いた名匠が待望の再客演。ベートーヴェンの交響曲第7番をメインに据えた王道のプログラムとエルガーのオラトリオ〈ゲロンティアスの夢〉を指揮し、バラエティーに富んだ旋律を丁寧に描いて刺激的なサウンドを築き上げる。

イギリス出身。1984年に古楽器アンサンブル、セント・ジェイムズ・バロックを創設したほか、94年から96年までスコットランド室内管首席指揮者、2004年から16年までザルツブルク・モーツァルテウム管首席指揮者、16年から25年までバーゼル響首席指揮者を歴任。現在は、マドリッド王立劇場音楽監督、ドレスデン祝祭管首席指揮者、ザルツブルク・モーツァルテウム管桂冠指揮者を務めており、オペラとシンフォニーの双方で活躍している。

これまでにオペラでは、ウィーン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、バイエルン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、チューリヒ歌劇場、パリ・オペラ座など世界の一流歌劇場に招かれており、ザルツブルク音楽祭、フィレンツェ五月音楽祭などに出演。またロイヤル・コンサートヘボウ管、ウィーン響、チューリヒ・トーンハレ管、BBC響、パリ管、フライブルク・バロック管など欧州の主要楽団に客演を重ねている。

CDやDVDでも数多くの名演を残しており、ブルックナーの交響曲全集のほか、ヘンデル〈セルセ〉やモンテヴェルディ〈ポッペアの戴冠〉などをリリースし、いずれも好評を博している。読響とは19年12月以来、2度目の共演。

4/22
名曲

4/28
定期

Maestro

4/4
土曜マチネー4/5
日曜マチネー

Artist



クラリネット

ニコラ・バルディルー

NICOLAS BALDEYROU, Clarinet

熟練のテクニックと卓越した音楽性で聴衆の心をつかむ実力派クラリネット奏者。フランス出身。ミュンヘンARD国際コンクール最高位受賞、ドス・エルマーナス国際コンクールなど入賞多数。カーネギー・ホール、コンセルトヘボウなど、世界中の名だたるコンサートホールで演奏している。2011年からフランス放送フィルの首席奏者を務める。ソリストとしてはバイエルン放送響、フランス国立管など欧州の著名楽団と共演を重ねるほか、リサイタルや室内楽の分野でも幅広く活躍している。2025/26年シーズンには、フランス放送フィルとサウリ・ジノヴィエフのクラリネット協奏曲の初演を予定している。07年よりリヨン国立高等音楽院で教鞭を執り、19年よりスコットランド王立音楽院客員教授を務める。読響初登場。

4/22
名曲

Artist

ドイツを拠点に国際的に活躍する本格派ピアニスト。ハノーファー国立音楽芸術大学在学中、ミュンヘン国際コンクール第2位入賞。クララ・ハスキル国際コンクール優勝で一躍世界の注目を浴びた。これまでに、国内外でリサイタルを開くほか、ティムカ・カネフ、ルイーザ・ヤノフスキ、ピエロフラヴェックらの指揮で、ウィーン響、バイエルン放送響、ベルリン放送響、チェコ・フィルなど一流楽団と共演している。文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞、ミュージック・ペンクラブ音楽賞、サントリー音楽賞ほか受賞多数。2019年には映画「蜜蜂と遠雷」でピアノ演奏を担当して話題となった。現在、ドイツのフォルクヴァング芸術大学教授。読響とは09年の初登場以来、共演を重ねている。



ピアノ

河村尚子

HISAKO KAWAMURA, Piano



©Olivia da Costa

天使 (メゾ・ソプラノ)

ベス・テイラー

BETH TAYLOR, Mezzo Soprano

深遠な歌声と抜群のテクニックで頭角を現すメゾ・ソプラノ。イギリス・スコットランド出身。スコットランド王立音楽院で研鑽^{けんさん}を積み、2022年にはエリザベス・コネル国際コンクールに優勝するなど受賞多数。ベルリン・ドイツ・オペラ、チューリヒ歌劇場、ザルツブルク音楽祭、BBCプロムスなどに出演し、ロッシーニからワーグナー作品まで幅広いレパートリーを歌い好評を博している。ラトル、ベトレンコら名匠の指揮でベルリン・フィル、ミュンヘン・フィルなど著名楽団と共演。25年5月にはニューヨークのカーネギー・ホールにデビューしたほか、同年10月にはドグメル指揮のロサンゼルス・フィルとマーラーの交響曲第2番で共演し、ロサンゼルスからスタートし、東京やソウルなどアジア・ツアーを行い、好評を博した。読響初登場。

卓越した表現力と豊かな声色で世界の檜舞台上で活躍する気鋭。ニュージーランド出身。ニュージーランド音楽学校とギルドホール音楽演劇学校で学んだ後に、英国ロイヤル・オペラのジェット・パーカー・アーティストとして多くの舞台に出演。近年はハンブルク国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、パリ・オペラ座に〈ラ・ボエーム〉ロドルフォ役、〈カルメン〉ドン・ホセ役、〈蝶々夫人〉ピンカートン役で出演したほか、コンサートではBBC響やロンドン響とベートーヴェン〈ミサ・ソレムニス〉、ヘンデル〈メサイア〉、ロッシーニ〈スターバト・マーテル〉で共演し好評を博す。2025/26年シーズンにはザルツブルク復活祭にベトレンコ指揮〈ラインの黄金〉フロー役で出演するほか、マケラ指揮のバリ管と共演するなど、活躍の場を広げている。読響初登場。

ゲロンティアス／魂
(テノール)

トーマス・アトキンス

THOMAS ATKINS, Tenor

4/28
定期

Artist

4/28
定期

Artist



司祭／苦悶の天使
(バリトン)

クリストファー・モルトマン

CHRISTOPHER MALTMAN,
Baritone

重厚な音色で世界的人気を博すドラマチック・バリトン。英国王立音楽アカデミーで学び、1997年に英国ロイヤル・オペラ・デビュー、〈ドン・ジョヴァンニ〉表題役で一躍脚光を浴び、その後〈魔笛〉パパゲーノ役、〈シモン・ボッカネグラ〉表題役、〈ドン・カルロ〉ロドリゴ役、〈マノン・レスコー〉レスコー役など幅広いレパートリーで出演。近年は〈トスカ〉スカルピア役、〈オテロ〉イヤゴ役、〈ニーベルングの指環〉ヴォータン役などドラマチックな役柄を得意とし、ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、ザルツブルク音楽祭など世界中で活躍を続けている。コンサートでは、シカゴ響、フィルハーモニア管、BBC響、ロンドン響、ボストン響など主要楽団と共演を重ね喝采を浴びている。読響初登場。

合唱

新国立劇場合唱団

NEW NATIONAL THEATRE CHORUS,
Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。厳正な審査によって選ばれるメンバーは100名を超え、新国立劇場が上演する多様なオペラ公演を通じて、年々レパートリーを増やしている。個々のメンバーは高水準の歌唱力と優れた演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量を誇る。その確かな実力で、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家をはじめ、国内外のメディアからも高い評価を得ている。2007年以来、読響の〈第九〉公演に出演するほか、17年のメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、25年のベルク〈ヴォツェック〉、26年のプフィツナー〈ドイツ精神について〉などで見事な歌唱を披露し、好評を博した。



合唱指揮

富平恭平

KYOHEI TOMIHIRA,
Chorusmaster

東京都出身。東京芸術大学指揮科卒業。指揮を高関健、田中良和、小田野宏之に師事。東京二期会、新国立劇場、藤原歌劇団、日生劇場などのオペラ公演で副指揮、合唱指揮、コレペティートルを務めた。これまでに、〈フィガロの結婚〉〈椿姫〉〈パルジファル〉〈カルメン〉〈ばらの騎士〉〈ルル〉など、多数のオペラを手がけている。読響では2017年の〈アッシジの聖フランチェスコ〉、26年の〈ドイツ精神について〉などで新国立劇場合唱団の合唱指揮を務め、好評を博した。群馬響、東京シティ・フィル、東京フィル、東京響などにも客演。東京二期会音楽スタッフ、新国立劇場音楽スタッフなどを経て、19年4月に新国立劇場合唱指揮者に就任。洗足学園音楽大学非常勤講師。

モーツァルト

クラリネット協奏曲 イ長調 K.622

4/4

土曜マチネー

4/5

日曜マチネー

Program Notes

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)の〈クラリネット協奏曲〉は、親交のあったウィーン宮廷楽団のクラリネット奏者アントン・シュタードラーのために書かれた。この名手の音色に魅せられたモーツァルトは、当時まだ一般的ではなかったクラリネットをオペラや交響曲で積極的に用い、室内楽の分野でも〈クラリネット五重奏〉のような名作を残している。

この協奏曲は死のおよそ2か月前に書き上げられたが、この年モーツァルトは〈魔笛〉や〈皇帝ティートの慈悲〉、さらに未完に終わった〈レクイエム〉など、後世に決定的な影響を与える名作を次々と生み出していた。経済的困窮や体調不安を抱えつつも、それらの音楽は驚くほど澄みわたり、シンプルでありながら深い精神性を帯びている。本作は最晩年の傑作群の持つ透明感や穏やかさに加え、とりわけヒューマンな^{ぬく}温もりをたたえている。クラリネットはたっぷりとした低音域、輝かしい高音域など音域によって音色に特徴のある楽器だが、当時の改良型クラリネット(バセット・クラリネット)は低音域が増強され、モーツァルトはその柔らかな音色を生かし、人の声のように歌う美しい旋律を書き上げたのである。

第1楽章 アレグロ ソナタ形式。管弦楽の穏やかな主題提示に続いて独奏クラリネットがしなやかに旋律を受け継ぐ。

第2楽章 アダージョ 弦楽器の静かな伴奏の上に、クラリネットが息の長い旋律を歌い出す。控えめな装飾に深い情感がにじみ、天上から差し込む光のような透明さが時折ほのかな陰りを帯びる。

第3楽章 ロンド、アレグロ 軽快で親しみやすい主題が繰り返されるロンド形式のフィナーレ。舞曲風のリズムに独奏が軽やかなパッセージで応える。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

R. シュトラウス 交響詩〈英雄の生涯〉作品40

リヒャルト・シュトラウス(1864~1949)は初期に習作的な交響曲を書いた後、1880年代後半から90年代にかけて10年余りの間にシェイクスピア、ニーチェ、セルバンテスなどの文学作品やドイツの民話に依拠した交響詩を次々と発表した。

〈英雄の生涯〉は7作に及ぶ一連の交響詩創作の最後を飾る作品だが、特定の文学的テキストやロマン派的な観念に拠るのではなく、近代における芸術家と社会の関係を、風刺や皮肉を利かせながら即物的に描いている。英雄や芸術家の描写はベートーヴェンの〈交響曲英雄〉に始まり、ベルリオーズ〈幻想交響曲〉、ワーグナー〈マイスタージンガー〉に至る先例があるが、指揮者としても活躍していたR.シュトラウスは先人たちの仕事を踏まえながらも、それを様々な面で更新しようとしている。

まずは音響世界そのものの拡大。ヴァイオリンのソロをはじめソリストティックなフレーズが各所に現れる一方、編成を拡大して聴衆を圧倒する物量戦により、奥深い遠近感が追求されている。巨大オーケストラ上にモチーフをモザイク状に積み上げた絢爛たるサウンドは、他の追随を許さぬ職人芸だ。単一楽章ではあるが、各部には主題提示、スケルツォ、緩徐楽章、展開・再現といった構成上の役割が重ねられており、ストーリーと音楽形式が高度に結びつけられている。

標題性の点から興味深いのは、「英雄」と言ってもロマン派的な英雄や孤高の芸術家のイメージとは距離があり、どこか醒めた目で戯画的に描かれている点だ。この曲に続いて作曲された〈家庭交響曲〉〈アルプス交響曲〉では自身のプライベートな体験により踏み込んでおり、長年望んでいたオペラでの成功を〈サロメ〉で手になると、文学との関わりはオペラへとシフトしていく。20世紀に入りロマン派的な交響詩という器が時代にそぐわなくなってきたことを、R.シュトラウスのアンテナは敏感に掴んでいたのだろう。〈英雄の生涯〉はそうした点で創作の転換点を示すのみならず、世紀末という時代の区切りを画している点である。

楽曲は大きく6つの場面から成るが、各部は切れ目なく演奏される。“英雄”冒頭から幅広い音域にわたる勇壮な英雄の主題が提示され、フルートとヴァイオリンが展開する優美でなだらかなテーマが続く。この旋律はトリルなどによって華

やかに装飾されている。“英雄の敵”半音階で下行する木管楽器が不穏な空気を予兆し、チューバに平行5度の不気味なテーマが現れる。これは英雄の敵、すなわち評論家を表している。“英雄の伴侶”R.シュトラウスの妻パウリーネは優れたソプラノ歌手であった。ここではパウリーネの肖像を独奏ヴァイオリンで描いている。甘いフレーズを歌ったかと思えば、突然怒り狂ったりもして、その人柄がチャーミングにとらえられている。中低音域に現れる旋律が、夫婦の愛の対話を暗示する。“英雄の戦い”舞台裏からトランペットが鳴り響き、敵との本格的な戦いが始まる。軍楽隊の勇ましいリズムに乗って英雄が敵を蹴散らした後は、過去の自作からのモチーフが次々と引用され英雄の勝利を暗示する。“英雄の業績”交響詩〈死と変容〉〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉、歌劇〈グントラム〉など自作からのフレーズが次々と引用され、英雄は作曲家本人であったことが暗示される。“英雄の引退と完成”引き続き過去の引用をちりばめながら穏やかな結尾を導く。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1898年／初演：1899年3月3日、フランクフルト・アム・マイン／演奏時間：約45分
楽器編成／フルート3、ピッコロ、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン8、トランペット5、トロンボーン3、チューバ、テナーチューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、テナードラム、トライアングル、銅鑼）、ハープ2、弦五部

〈英雄の生涯〉ソロ・ヴァイオリン

知性あふれる演奏で読響を牽引する名手。ウィーン国立音楽大学卒業、同修士課程を最優秀で修了。プレシア国際コンクールでの日本人初の優勝など受賞歴多数。チリ国立響、バドヴァ・ヴェネト管などと共演し、好評を博す。2014年までノイエ・ヴェストファーレン・フィルの第1コンサートマスター、14年から17年までハノーファー北ドイツ放送フィルの副コンサートマスター、17年から21年までヴッパータール響の第1コンサートマスターを務めた。21年4月に読響のコンサートマスターに就任。25年4月からは第1コンサートマスターを務め、常任指揮者ヴァイグレらからも厚い信頼を得ている。現在、東京芸術大学弦楽科非常勤講師。



ハイドン

歌劇《哲学者の魂、またはオルフェオとエウリディーチェ》序曲

長年、ハンガリーの大貴族エステルハージ侯爵家の楽長を務めたフランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)は、1790年9月に当主のニコラウス侯が亡くなると職務から解放され、ウィーンに移り住んだ。そのことを知ったヴァイオリニストで興行主のペーター・ザロモンはウィーンに向かい、仕事を依頼する。ザロモンが示した、ロンドンの公開演奏会で新作の交響曲を自身の指揮で演奏するという企画に心を動かされたハイドンは、91年1月、ロンドンに渡った。

ザロモンの契約には、歌劇の興行を手がけていたジョヴァンニ・ガッリーニのためにオペラを作曲することも含まれていた。ギリシア神話のオルフェオとエウリディーチェの物語を題材に書かれたバディーニによるイタリア語の台本を受け取ると、すぐに作曲に取りかかった。これまでオペラはエステルハージ侯爵家のために書いてきたが、今回は大都市ロンドンの歌劇場での上演とあって、ハイドンは並々ならぬ意欲を示した。オーケストラの規模も大きく、ロンドンの聴衆の好みを入れて合唱を重視したオペラは、3月に第2幕まで書き終え、5月に全曲が書き上げられた。しかし、オペラ上演をめぐる国王派と皇太子派の対立に巻き込まれたガッリーニは、ハイマーケットの王立劇場の上演許可を得ることができず計画は流れ、ハイドンの生前に本作が上演されることはなかった。

《哲学者の魂、またはオルフェオとエウリディーチェ》のタイトルは、1820/30年の筆写譜に初めて現れる。ハイドンの自筆譜には「哲学者の魂」と記され、そもそもなぜ「哲学者の魂」なのか不明である。幕開けの序曲は、付点のリズムが強調された導入(ラルゴ)に続き、ハ長調に転じた主部(プレスト)はオーボエ・ソロによる明朗な旋律から始まり、活気をもって華やかに盛り上がる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1791年／初演：1951年6月9日、フィレンツェ／演奏時間：約4分
楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

モーツァルト

ピアノ協奏曲 第19番 へ長調 K.459

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)は、1784年にウィーンで6曲のピアノ協奏曲を書いた。その最後となる第19番は、12月11日に完成した。作曲の目的は不明だが、当時、モーツァルトが演奏拠点のひとつとしていたトラットナー館のカジノ(今日で言うところの集会所)で12月から始まった待降節の公開演奏会シリーズのために作曲された可能性が指摘されている。また、この協奏曲は「第2戴冠式」の愛称でも知られる。が、それは、1790年10月15日にレオポルト2世の戴冠式を祝う演奏会でモーツァルトがピアノ協奏曲第26番(戴冠式)を披露した際に演奏されたもうひとつのピアノ協奏曲が、初版楽譜(1794年)の記入から、第19番とされることに由来する。

モーツァルトは、1784年と翌年に交響曲を1曲も書いていない。その代わりというわけではないが、このピアノ協奏曲のオーケストラパートは独奏ピアノと緊密に結びつき、第1楽章では快活なリズム動機を楽章全体で徹底して用いたり、終楽章で Rond 形式とフガートを融合させるなど、手が込んでいる。なお、モーツァルトは、第1楽章のカデンツァ、第3楽章のインガング(楽章の中ほどで Rond 主題を導き出すピアノ・ソロ)とカデンツァを書き残している。

第1楽章 アレグロ 協奏的ソナタ形式。オーケストラの提示部に続いて、独奏ピアノが快活なリズムの第1主題、穏やかな第2主題を示す。展開部ではリズム動機がちりばめられ、巧みな転調や木管楽器が効果的に活用される。

第2楽章 アレグレット 安らぎに満ちた主題が、独奏ピアノとオーケストラで掛け合いながら広がる。途中にはさまれる短調の主題の^{かけ}翳りも美しい。

第3楽章 アレグロ・アッサイ 独奏ピアノが華やかに活躍する。軽やかに弾む Rond 主題の間に短調のフガートなど新しい楽想がはさまれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1784年／初演：不明／演奏時間：約26分
楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏ピアノ

ベートーヴェン

交響曲 第7番 イ長調 作品92

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)にとって、1808年初演の〈運命〉と〈田園〉以来の交響曲となる第7番は、1813年1月に完成した。これほどの期間、交響曲の創作から離れていたのは、社会情勢の変化で貴族からの年金が打ち切られたり、情熱的な手紙が残されている「不滅の恋人」との叶わぬ恋など、作曲家自身が人生の転機にあったこととも関係しているだろう。さらに創作において新たな局面を開くためには、作曲語法の開拓や発想の転換に加え、それを熟成させていく時間も必要だった。

これまでのベートーヴェンの交響曲では、動機あるいは楽想といった小さな単位を徹底的に組み合わせて音楽を構築していたが、ここではその方法を破棄して、まとまりのある旋律を主題として用いることにした。それによって主題は、「カンタービレな(歌うような)性格」を帯びるが、ベートーヴェンは、ただ旋律の美しい流れに音楽を任せるのではなく、交響曲に欠かせない構築性を保つために、第7番ではリズムを前面に出して、音楽的な緊張感と力動感を生み出した。4つの楽章は、それぞれ特徴的なリズムをもち、リズム動機によって音楽全体が統一されている。

第1楽章 ポーコ・ソステヌート〜ヴィヴァーチェ ゆったりとした序奏部に続いて、フルートとオーボエによるリズム動機が強調された後、ソナタ形式の主部に入る。

第2楽章 アレグレット 葬送行進曲風のリズムが穏やかに反復する。

第3楽章 プレスト スケルツォ的な性格の楽章で、軽快な部分と美しい旋律が歌われる部分が対比される。

第4楽章 アレグロ・コン・プリオ ワーグナーが「舞踏のアポテオーゼ(神格化)」と評したように、リズムの饗宴とも言える華やかな楽章。アイルランド民謡に由来する第1主題を中心に高まり、最後は管楽器の咆哮を合図に燃え上がる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1811~13年/初演：1813年12月8日、ウィーン/演奏時間：約36分
楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

エルガー

オラトリオ〈ゲロンティアスの夢〉 作品38

来世はあるのか

人間は死後どこへ行くのか？ 古来人類が抱いてきた普遍的な問いである。この問いに対する一つの回答が「煉獄」(purgatorio)の思想である。キリスト教とりわけカトリック教会において徐々に形成されたもので、ダンテ・アリギエーリ(1265~1321)の『神曲』の「煉獄編」でも知られる。死後、人間の魂は天国に迎え入れられる前に煉獄と呼ばれる領域で浄められる。19世紀後半の英国で煉獄を文学的な表現で描いたのが、ジョン・ヘンリー・ニューマン(1801~90)の長編詩『ゲロンティアスの夢』(The Dream of Gerontius)であり、これを音楽化したのが、エドワード・エルガー(1857~1934)の同名のオラトリオである。

聖人と英雄：ニューマンとゴードン

ニューマンは19世紀ヴィクトリア朝の英国を代表する宗教家・思想家・文学者の一人。オックスフォード大学で神学を学び、英国国教会のエリート聖職者として栄達が約束されていた。しかし、信仰の刷新を図る活動(オックスフォード運動)を続けるうちに、国教会の教義に疑問を抱き、転会(異なる宗教間での宗旨替えは「改宗」であるが、同一宗教内の教派の変更はこのように呼ぶ)し、カトリックの司祭となる(注1)。国王を頂点とする国教会が支配的な英国社会で、これは並大抵の勇気ではできなかった。エルガー自身もカトリック信徒で、英国社会では少数派として偏見や差別に苦しめられていた。世間の誹謗中傷にさらされながらも、己の信仰を貫いたニューマンは、エルガーにとって「生ける聖人」であった。

エルガーの〈ゲロンティアスの夢〉作曲にはもう一人、「英雄」が関わっている。チャールズ・ゴードン将軍(1833~85)である。クリミア戦争と太平天国の乱の鎮圧に輝かしい戦功を立て、アフリカではスーダン総督として腐敗の一掃と奴隷売買の禁圧に辣腕をふるう。勇猛な軍人である一方、篤信の無宗派のキリスト教徒であり、中国やスーダンで布教に努めた。名利に恬淡、妻帯もせず、任務に邁進する清廉な姿はあたかも十字軍の騎士であった。1885年、イスラーム原理主義

者マフディーの乱が勃発したスーダンに再び赴いたゴードンは、ナイル川上流の町ハルツームで叛徒軍に包囲され壮烈な戦死を遂げる。脱出の機会があったにもかかわらず、住民を叛徒の暴虐から守るため踏みとどまったのである。ゴードンの遺品からは感想がびっしりと書き込まれた『ゲロンティアスの夢』が発見され、英国社会に深い感動を呼び起こした。ニューマンの『ゲロンティアスの夢』はゴードンを通じて英国社会に広まっていった。『ゲロンティアスの夢』を座右の書にしていたゴードンに親近感を覚えたエルガーは彼をモチーフにした交響曲を構想し、後年形を変えて交響曲第1番（1908年初演）となる。

作曲と初演

『ゲロンティアスの夢』は、カトリックに転会後のニューマンが1865年に書いた、信仰告白の内容を持つ長編詩である。ゲロンティアスという名の男が亡くなって魂となり、守護の天使に導かれて天上を旅し、神を垣間見た後に煉獄へ至るさまが描かれている（注2）。

エルガーは青年時代以来『ゲロンティアスの夢』を愛読しており、それを音楽化する構想を長年温めていた。作曲の直接の契機はバーミンガム音楽祭からの依頼である。この音楽祭は3年毎に開催される合唱音楽を中心とする伝統ある音楽祭で、エルガーは1900年の音楽祭で演奏する新作を委嘱された。1899年の〈エニグマ変奏曲〉初演の大成功で、国民的作曲家の地位を確立していたエルガーは、『ゲロンティアスの夢』に基づく大作を1年足らずで完成させた（注3）。

エルガー自身が「わが最良の作品 The best of me」と語るほどの自信作であったが、1900年10月のバーミンガムにおける初演は失敗に終わる。しかし、作品の真価を見抜いたドイツ人指揮者ユリウス・ブーツ（1851～1920）が翌1901年12月にデュッセルドルフで行ったドイツ初演が大成功をおさめ、作品はまずドイツで受け入れられた。当時飛ぶ鳥を落とす勢いだった作曲家R. シュトラウス（1864～1949）も〈ゲロンティアスの夢〉を絶賛した。その後、ドイツから逆輸入される形で英国でも演奏機会が増えていった。現在では〈エニグマ変奏曲〉、交響曲第1番やチェロ協奏曲と並ぶエルガーの代表作と評価されている。

楽曲解説

〈ゲロンティアスの夢〉は「ワーグナーの楽劇の手法で作られた宗教オラトリオ」

と呼べるかもしれない。1890年代よりリヒャルト・ワーグナー（1813～83）に傾倒していたエルガーはロンドンやパイロイトでたびたび、その作品を観劇しており、とりわけ〈パルジファル〉を好んでいた。示導動機（ライトモチーフ）と半音階の多用、無限旋律的な滔々たる音楽の流れ、大規模な管弦楽を用いながらも間接照明のようなくすんだ音色、そして何よりも贖罪と救済のテーマという点で〈パルジファル〉と〈ゲロンティアスの夢〉は近親関係にあると言える。

作品は前奏曲と二つの部分から構成されている。

第I部 死の床にあるゲロンティアスの周囲には司祭と友人たちが集まり、彼のために祈っている。迫りくる死の恐怖と戦いながら、ゲロンティアス（テノール）が決然と信仰告白を歌う（聖なるかな、力ある方）。やがて力尽きたゲロンティアスは、司祭（バス）の励まし（旅立ちなさい、キリスト者の魂よ）と友人たちの祈りに送られ、魂となって昇天する。

第II部 ゲロンティアスの魂を守護の天使（メゾ・ソプラノ）が出迎える。魂は天使と対話しながら天上を進む。突然不穏な空気になり、禍々しい悪魔の合唱（卑しい生まれの野蛮な地上の奴らが）が鳴り響く。その喧騒をかわし、魂は天使に神との対面を懇願する。天上の賛美の合唱（いと高き所では至聖なる主をたたえよ）が重なり高まっていく中、魂はついに神の領域に入る。神の傍らでは苦悶の天使（バス）が魂の救済を祈り続けている。神の御姿を垣間見た魂は法悦に打ちのめされる（私を連れて行き、もっとも深い淵に置いてください）。天使は魂を優しく煉獄へ導き入れる（静かに穏やかに）。ゲロンティアスの魂の救済が約束され、天上の合唱が神を讃える中、やすらかに全曲が閉じられる。

注1 ニューマンは1879年に枢機卿（カトリック教会の高位聖職者）に任命され、英国におけるカトリック復興の象徴となる。2019年には列聖され、聖ニューマンとなった。

注2 「夢」とは「目が覚めたら夢であった」という、いわゆる「夢オチ」の話ではない。現実には信じられない素晴らしい経験をした時に、人は「夢のようだ」と語る。ニューマンが「夢」という語を使用したのは、現世において人間が覚知できる現象をはるかに超えた神秘的なものを表現したかったからである。

注3 エルガーが音楽化したのはニューマンの600行から成る原詩の半分程度であり、リブレットはエルガー自身が作った。

〈等松春夫 英国音楽研究者〉

作曲：1900年／初演：1900年10月3日、バーミンガム／演奏時間：約100分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、スレイベル、銅鑼）、ハープ、パイプオルガン、弦五部、独唱（メゾ・ソプラノ、テノール、バリトン）、合唱